七夕祭りのはじめ

佐藤三郎

東京の夏の風物詩の一つに数えられるようになった福生の七夕祭りも、昨昭和四十五年には二十回目を迎えましたが、それはそれは大変な賑わいでございました。

なにしろ、七夕を見においでになったお客さんで、駅前の通り、銀座通り、そして栄通りがぎっしりと埋まり、身動きも容易に出来ない程の混雑でした。ゆっくり七夕見物をと思っても、あとからあとからと詰めかける人波に押されて立止ることもできず、何度か同じコースをまわらなければ、見落してしまう竹飾りもある状態でございました。

さて、これ程有名になった福生の七夕祭りもはじまるまでは時間もかかり、根気もいりました。なぜ、時間をかけ根気よく七夕祭りをしようとしたのでしょうか。

昭和二十四、五年頃の福生の商店は、西には老舗の街青梅、南に織物の八王子、東には交通の便がよく、急速に延びてきた立川があり、それらの商店街とを比較いたしますとどうしても見劣りがし、実際に消費者もそちらの方へ流れて行く傾向にありました。この流れはなんとしても喰止めなければなりません。その打開策として、福生という地名を売り込み、福生の商店が親しま

れ、福生といえば『何々』というキャッチフレーズを作り、福生をイメージアップさせたいということでした。あれこれと関係者で議論しました。不動様の縁日をやろう、芝居はどうだ、のど自慢大会は……等々意見が出ました。決定的な案は出ません。

そこで私が実際に見て非常に感銘をうけたことを話し提案したのでございます。それというのは、終戦直後の一年半ばかり、私は仙台に住んでおりました。仙台の街は、戦争の末期に大空襲にあい、一面の焼野原となってしまいました。市民の多くは、焼けたトタンを集めてバラックを建てたり、ベニヤ張りの急造の店を出し、防空壕住まいの人もありました。ところが、二十一年の八月の七夕の日になって驚きました。トタンで囲われたバラックの家や、ベニヤ張りの店の前に大きな竹が立ち、色とりどりの短冊や吹流しに、千羽鶴、それに大きな楠玉や、趣向をこらした仕掛等が一杯垂れ下がっているではありませんか。大空襲にあい、戦争に負け、物資も乏しく、自分たちが住んでいるところも満足でないのに、どう工面し、調達したのかはわかりませんが、真黒に焼けただれた街とは対照的に、幾十幾百というそれぞれに趣向をこらした華麗な竹飾りのトンネル。その見事さに言葉もありませんでした。心なしか、七夕の終わったあとの市民も元気を取戻し、街も明るくなったように見えたのでございます。

以上のことをお話し、七夕祭りを提案し、皆さんの賛同を得ました。さて、実際に実施しようとするには資料も研究も不足でございました。「第一、そんな飾り付けを商人が作っていられる

か、そんな暇はないぞ」「幼稚園児や小学生に作らせればいいじゃないか」「七夕祭りをするならば露店商はどうする」等々。そのうちに、埼玉県の入間川でも七夕をやっているとの情報があり、さっそく入間川の役場に七夕のことについて問合せたところ、今まで七夕をやってきたところは伝統があるから止むを得ないが、金もかかり暇もいるので、あまりおすすめできませんということでした。

こんなことで一年経ち二年後の昭和二十六年になりました。駅前の商店で結成している中央商栄会が、中元売出しのデモンストレーションとして、とうとう七夕祭りを実施することに踏切ったのでございます。この年の七月六日より八日までの三日間、これが福生の七夕祭りの発祥でございます。

七月五日の夕方、町の竹林から伐りだされた竹が、各商店に一本ずつ配られました。二年間も温めてきた夢が明日実現することになったのです。成功か、失敗か。その成否の鍵を握る天候は。その晩は期待と不安とが交錯してとうとう一睡も出来ませんでした。やがて朝になりました、晴れです。天候は上々。竹に色とりどりの短冊や、赤や青のモールが飾り付けられました。浅草の近くの問屋から仕入れてきた規格品です。今から考えるとまことに質素な七夕飾りでした。しかし、飾り付けのできあがった竹が各商店に樹てられると、今までの商店街とは違った雰囲気となり、珍しがって人々が見にきてくれました。夜になるとますますたくさんの人出になったので

ございます。まず成功でした。

この結果を見て、他の商店街も次年度から同調することとなり、このため商店街連合会まで結成され、今日の商業協同組合の地盤固めとなったのでございます。昭和二十七年からは福生町全域の商店街が七夕祭りに参加し、飾り付けも統一した規格品ではなく、各商店はそれぞれの特色を生かし、化粧品店は化粧品の空箱を吊したり、そば屋さんは笊や蒸籠を飾ったりで、それはそれとしてお客さんから好評をうけました。

この年に初めて、竹飾りのコンクールが行なわれたのでございます。二十八年には三大新聞に七夕祭りの記事が載りました。写真コンクールも始まり、駅前通りと銀座通りは、期間中、車は通行禁止されました。立川駅構内に、大きな楠玉三つと、吹流しをつけた竹飾りを、宣伝のため展示しました。また、露店商については、七夕祭りが盛大になるにつれてその数が増し、案ずるより生むが易しでございました。

二十九年には欲が出まして、七夕の終わったあとが急に淋しくなるので、何か良い方法はないかと考えたあげく、廻り灯籠なら夏のものだからというので、七夕の終わったあとの九日から三十日まで、夏の夜に涼味と野趣味をただよわせようとしたのです。が、商店の夜は照明が明るく、廻り灯籠はどこにあるのかさっぱりでこれは失敗し、たった一回だけでした。この年から七夕祭りのための青梅線増発が実施されております。また、この年に七夕祭りの先進地である入間

川に、バス一台を借りきって関係者で見学に行きました。その後は、仙台にも見学に行ったりして段々と福生の七夕祭りは洗練されてまいりました。

飾り付けといえば、各商店の仕掛や竹飾りは年々歳々異なり、七夕祭りの三月も四月も前から創案し、家の者以外には絶対に秘密にして作るのでございます。そして七夕祭りが近ずくと家の中は七夕の飾りもので一杯になり、寝る場所もないという騒ぎです。人々に楽しんでいただくための、各商店の苦心も、それは大変なことでございます。

これほどまでになった七夕祭りも、竹飾りの華やかさにくらべて、そのかげで警備にあたってくださる警察をはじめ諸団体の人たち、交通機関等のご苦労も感謝しなければならないことでございます。

（元福生町役場職員）

七夕と福生音頭

坂本丁次

「七夕」と書いて、どうして「タナバタ」と読むかで、いろいろな説がある。『万葉集』の「棚機つ女」（たなだたつめ）ということばから出ていると説く人もある。棚機つ女とは盆に帰ってく

る神様を迎えるために、水のほとりに棚をつくって、機を織っていた乙女のことだ。

福生の七夕祭りも、二ケタになるとマンネリ化してきた。町も祭り全体の手直しを始めた。一般から論文を募集、それを参考にして祭りに〝演出〟を打ち出した。飾り付けにはつねにテーマを設け、期間中に行なう行事は街頭に集中させることにした。一方、栄通りの露店も新しい呼びものとして、積極的に保護することにした。

昭和三十六年の第十回目からは、飾り付けも豪華になり、歌舞伎の名場面を再現するなど、ショー的要素を盛りこんだ。行事もミス東京パレード、米第五空軍パレード、小学生の鼓笛隊の登場、歌謡ショーとはなやかになった。

その間、祭りを演出する人たちは、各地の伝統ある行事と祭りを見学した。中でも仙台と平塚の七夕祭り、山形の花笠踊り、徳島の阿波踊りは参考になったという。仙台には伝統があり、平塚は日本一の竹飾りを売りものにしており、福生では何に特色を出そうかと迷ったりもした。

山形、徳島の影響で、三十九年ごろから福生の七夕祭りにも踊りをとりいれる案が出てきた。これには多くの町民に、祭りに参加してもらう意味もふくまれていた。四十一年に「福生音頭」の歌詞を全国から募集、八十一編の応募があった。

レコーディングはコロンビアに依頼した。同社は当時、丸山鉄雄文芸部長。丸山さんはNHKで「日曜娯楽版」を製作した人。二時間ほどの話し合いで、福生音頭の製作スタッフは西沢爽作

詩、万城目正作曲などが決まった。歌手は新人の都はるみ、杉良太郎を起用することにした。都は当時まだあまり売れてなかったが、その将来性と、四十年の福生の七夕祭りに参加して歌った実績があるのを買った。

全国から募集した歌詞を審査した結果、都内の池野美千留さんが一位に入賞した。しかし、そのままではレコーディングできないと、西沢爽さんが新しく作詞した。西沢さんが福生を見てまわったとき、歌詞には「多摩」と「鉄路はたすきがけ」の二つのことばをいれてほしいと希望した。そこで音頭の二番に「多摩の岸辺にゃやさしい桜よ」、四番に「結ぶ鉄路はたすきがけ」との詩がはいった。「鉄路はたすきがけ」とは、福生には国鉄八高、青梅、五日市の三線が、たすきがけのように走ってるという意味である。

レコーディングの日が大変だった。コロムビアはベースアップでストの最中。福生からマイクロバスで二十人が見学に行ったが、スタジオで二時間も待たされて、本番になったが、都はるみが曲を知らないありさま。何とか吹き込みは終わったが、四番が問題だ。レコードで二人の歌手が登場すれば、最後の四番はデュエットするのが常識だ。それが、都が曲を覚えてないため、福生音頭には仲よく歌う男女の声がない。

福生音頭は街頭で踊るよう振り付けした。曲に乗って前進はするが、バックはない。小道具を持って踊れば派手に見えるし、太鼓や笛の生の音をいれれば一層ひき立つ。四十一年から福生音

頭パレードとして、七夕祭りの大きな行事の一つになった。平塚市は福生音頭を見て、四十五年に同じ都はるみで「七夕おどり」を製作パレードを始めた。テンポが早く、明るい曲だ。

福生の七夕祭りは四十二年まで、平塚と同じ七月上旬に行なわれていた。しかし、この期間はまだツユが開けず、雨の日が多い。四十二年には四日間の祭りで、初日だけが晴れ、あとの三日は大雨が降り、みんながっかりした。そこで商店街を中心に世論調査をしたところ、八月の方がよいとの声が大半を占め、四十三年から仙台と同じ八月上旬にした。

七夕祭りは十回以降「東京オリンピック」「福生音頭制定」「市制記念」などをテーマとして、四十五年に二十回まで進んできた。この間の飾り付けを見て、福生には「壁面飾り」という特色があるのがはっきりした。仙台、平塚にも多少の壁面飾りはあるが、福生ほど多くない。福生では竹飾りとともに、壁面飾りも大切にしたい。

二十回の七夕を終えて、福生市の主催者はまたマンネリ化と戦うときがきた。福生と同じ回数で、ともに進んできた平塚市の悩みも同様である。仙台には伝統があるが、福生も平塚も商業振興の目的で七夕を始めただけに、今後が本当の意味での勝負になる。

観光も祭りも宣伝の占める位置は大きい。福生市は今後、マスコミ対策をどうするかが課題だ。仙台、平塚と比べ市の規模も小さいが、宣伝は一パーセントにも達しない。新聞とともにテレビへの売り込みも積極的でありたい。宣伝にも独自のにくい〝演出〟を望みたい。（東京新聞記者）